

七、雑感

人間が人間の領域を知ることが困難である。

人間が人間のことに忠実でないために、人間の努力によって解決すべきことを、絶対の領域のことだとなすりつけたり、運命に荷負わせたり、神を造ってその責任にしたりする。

人間の迷心は、人間の領域のことを自分で解決しようとする忠実さのない者の陥る暗い穴である。

人間の領域のことは、人間の努力によって解決さるべきである。

無信仰は、人間の領域と、絶対の領域との区別がつかず、あるいは人間の力を過信して、何もかも経験的に処理してゆけると思う人間の傲慢がもとである。

人間の歩みに忠実である時、人間の力の領域、知能の領域を超えた、絶対の世界がわかつてくる。

親鸞聖人の他力本願の世界は、相対的な人間の努力の世界を無視し、または軽視した、怠惰者のわかる世界ではない。人間の努力、はからいの窮極、行きづまりにおいて開けてくる世界である。

人間の精進努力をぬきにした他力は、無力になり、如来の絶対他力をぬきにした精進努力は、迷妄であり、したがって不淳であり、相続せず、歓びなく、安心なく、不退転であり得ない。

如来は絶対であり、衆生は相対である。しかし如来は永久にただ絶対であるのではなくて、衆生の身口意の三業の上に顕現して、衆生の人格内容となり、仏凡一体となって、衆生に解き得ぬ衆生の問題を本質的に解決してくれるのである。

如来を信ずるとは、人間の精進努力を無視することではない。

人間の生活が、如来の聖なる生命に関与するということにおいて、人間の生活が、精進努力が、絶対に尊重せられる世界である。

如来を信ずる者は、自我の功利的態度によって行動せず、大悲報恩の全我的生活を営むがゆえに、真実の精進、正しい真実の生活は成就せられる。

相対なるものはからうことによつて、絶対を動かさし知ることができない。しかし、絶対は相対に内在して、相対をして絶対の徳を發揮せしめることができる。

如来は、衆生の真実行のすべてである。

如来を信ずる者は、己を空しうして、如来の本願力に乗托す。すでに乗るのであり、托するのである。この全我を挙げて托する世界がないならば、宗教ではない。しかしこうしてこの全我を投托する一面を持たぬ、せせこましい人間の努力は、必ず人間を人間的行きづまりへとつれてゆく。

宗教独特の天地は、全我を如来に托した寂定の法悦である。

「大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬれば、至徳の風、静かにして衆禍の波転ず。」

一切を托しきるところ、いかなる時にも、そこに衆禍波転の無碍道を発見することができる。

汎太平洋仏青大会の時、日比谷公会堂における歓迎会で、吉田晴風氏の尺八と、宮城道雄氏の琴の演奏を、数番にわたって聞いて、感銘深いものがあつた。かかる権威者の熱演を聞いていると、魂の深いものをよびさまされる。

盲目であれまでに達するには、血のにじむような精進があつたに違いない。吉田晴風氏にしたところが、顔全体が、いな体全体が、一管の尺八とともに鳴っている。

人間の技巧からはじまって、ついに技巧をこえて自然の神韻にまで達している。

私は、人生一代何かの達人になつた人の裏の努力を思うとともに、聖人が自然法爾と言われた念仏の世界を憶うた。六字の大行は、聖人に乗せて生かす船であつた。大行は人間の努力の彼岸である。

2

科学偏重は現代社会の通弊であつた。しこうして、今やその行きづまりのために世界的に悩んでいる。今や人間はこの行きづまりにあたつてこれをいかにすべきかを求めはじめた。哲学の貧困という言葉が言われてきたが、今や科学の貧困を暴露した。科学万能から正しい科学が生まれはしない。それぞれがそれぞれの役割を知らなければならぬ。

失恋に悩む者に北斗星を教えても何の役にも立たないからといって、天体の研究、星の研究が無意義ではない。某博士は、もし今結核に対する薬が発見されたら、釈尊、キリスト以上に人類から仰がれようと言つた。結核菌一つ亡ぼす注射がない。依然として、人体の生きんとする力にのみたよらなければならぬ。医学、科学は科学の領域を知るべきである。

宗教に生きることは、科学に無智であるためと考えたり、宗教さえあれば一切の科学は無用だと思つたりするのは、ともに正しい考え方ではない。宗教には宗教の持つ独特の使命と世界とがある。宗教無視の世界とは、われらにとつては、生活無視の誤りだとしか考えられない。

私は仏教によって変な人間にされてしまった。世の人が時に大事にすることが大事に見えず、世の人が大事にしないことが大事に見えたりする。一例を挙げると、万

人の手に合わないことをすることを賢いと思つたり、そうしたことをしようとする。だが私は、だれにでもできることを見のがすまいと思う。したがって私は、一文字も知らぬ老婆とたいして違つた存在ではない。むづかしい一切を経頂いていると、そのことだけがはつきりする。

一人の人が、大きな理論で動いている。しかし実際に当たつてみると、小さい感情問題が、真の動機となつている。小さい一の悪感情をも重大視して、自己を清算し、培うことを忘れる時、小さい感情で大きなものを失うことになる。

一つの小さい苦にすら堪え得ないものが、社会改造を叫んでみたところで、なんにもならない。

民族の外に立ち社会の外に立つて、民族や社会を罵倒することによつて、本質の解決は生まれない。

民族の中に、社会の中に自己を投入し、随順して、その重き荷を荷負いきるよりほかは、民族や社会の更生はない。その民族の持つ力の中に一切の解決はある。

私は、徹頭徹尾、世界戦争を嫌悪する一人である。
人間の心臓よ、武器よりも偉大であれ。

仲のいい夫婦は、よく喧嘩するという。

しかしさらに、高められて、つまらぬ喧嘩よりも、尊敬による創造的夫婦となりたものである。性が、聖におきかえられ、深められることによつて夫婦は浄化せられる。

「歯には、歯を」という言葉がある。恨みに報ゆるに、恨みをもつてすることが勝つことである気がする。しかし怨恨に対するにも真実を、悪に対するにも合掌をもつて向かつてゆくところに真の勝利はある。忍の道は弱者の道に見える。初めは弱者の生き方に見えるに違いない。しかし深まるにしたがつて、真の勝利の相が現われる。

「時が一切を解決する。」私は痛切にこの言葉の真理性を憶う。私が悪い人だと思つた人が、時がたつて見ると悪い人ではなかつた。つまらないと思つた者が、なくてはならないものだった。ある人とは別れなくてはならなくなり、ある人には会わなくてはならなくなる。

真実をもつて一貫した生活をしなくてはならない。近視眼的にももの価値判断をしてはならないなどと、いろんなことを考えさせられる。

右に左に時計の振子のように、社会の一切は動きつつ因果律の支配を受けてゆく。